

## 児童虐待とは…



本来、子どもを守るべき保護者(親や親に代わる養育者)が、子どもの身体や心を傷つけることをいいます。

身体的虐待	殴る、蹴る、投げ落とす、激しく揺さぶる、やけどを負わせる、溺れさせる など
心理的虐待	言葉による脅し、無視、兄弟間での差別的扱い、子どもの目の前でドメスティックバイオレンスを行うこと など
ネグレクト	食事を与えない、ひどく不潔にする、家に閉じ込める、保護者以外の同居人による虐待を放置する など
性的虐待	性的行為の強要、性器や性交を見せる など

子育てに悩んでいませんか? 近所に心配なお子さんはいませんか?  
迷わず下記、電話相談窓口までご相談ください。

福岡市子ども総合相談センター (えがお館)

24時間受付(年末年始を除く) ☎092-833-3000

NPO法人ふくおか 子どもの虐待防止センター (F-CAP-C)

10:00~14:00 毎週火・水・土曜日(祝日・年末年始を除く) ☎092-832-5550

各区子育て支援課子ども相談係

月~金曜日 9:00~17:00(祝日・年末年始を除く)

区	電話番号	FAX番号	区	電話番号	FAX番号
東区	092-645-1082	092-631-1511	城南区	092-833-4108	092-822-2133
博多区	092-419-1086	092-441-1455	早良区	092-833-4398	092-831-5723
中央区	092-718-1106	092-771-4955	西区	092-895-7098	092-881-5874
南区	092-559-5195	092-559-5149			

## ~つながろう 子どもの笑顔のために~ 福岡ソフトバンクホークスも応援します!



子どもは、私たち社会のかけがえのない宝です。  
子どもの虐待という悲しい事件が後を絶たない今、子ども達の笑顔のために、  
私たち大人が手を取り合い、行動していくことが大切です。  
「つながろう 子どもの笑顔のために」、  
皆と一緒に、取り組んでいきましょう。

福岡を子どもの笑顔いっぱいの街にしましょう。  
僕も、子どもを持つ親として、そして1人の大人として、  
この活動と一緒に応援していきます!

松田 宣浩



### つながろう 子どもの笑顔のために

子どもの虐待防止のためには、市民・地域・  
関係団体・行政が何が出来るかを考え、一丸  
となって行動していくことが大切です。



平成29年8月8日

# 子ども虐待防止 市民フォーラム

## 報告書

企画・発行/福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

事務局/福岡市子ども未来局子ども家庭課

〒810-8620 福岡市中央区天神 1-8-1 TEL 092-711-4238 FAX 092-733-5534

平成30年2月発行

## 目 次

つながろう 子どもの笑顔のために .....	2
子ども虐待防止市民フォーラム概要 .....	3
基調講演 .....	4
トークセッション .....	11
参加者アンケート .....	19
パネル展 .....	20

## つながろう 子どもの笑顔のために

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会は、市民、地域、関係団体、行政が一丸となって、児童虐待防止に向けた取組みを推進するため、平成22年5月に、子どもに関わる団体と福岡市が協働で発足しました。「つながろう 子どもの笑顔のために」を合言葉に、関係機関の連携強化とともに、市民フォーラムや専門家向け研修、相談窓口の広報などに取り組んでいます。

このフォーラムは、虐待防止のためにそれぞれの団体や個人で何ができるのか、その活動のヒントになればと思い、毎年開催しているもので、今回は8回目となりました。フォーラムの内容については、ワーキングメンバーで企画し、当日は、子どもに関わる様々な機関や団体の方、地域の方など、約350人に参加いただきました。子どもや家族の置かれた厳しい現状と、実際の地域での取組みなどを聞き、一人ひとりが、子どものためにできることを考え、そして行動していくことの大切さを実感し、多くの方が同じ気持ちでいらっしやることを心強く感じました。

このような思いと様々な団体、個人の行動が福岡市全体につながっていくことを願って、フォーラムの内容をまとめた本冊子を発行しました。関係者の方の研修会などでご活用いただけることを願っております。

今後も、福岡市子ども虐待防止活動推進委員会は、このまちの子どもや家庭を支える人とともに、虐待防止に取り組んでまいります。

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

### 参加団体(28団体)

※平成30年2月現在

- 一般社団法人 福岡市医師会 ●福岡県弁護士会 ●一般社団法人 福岡市歯科医師会
- 一般社団法人 福岡県助産師会 ●一般社団法人 福岡市私立幼稚園連盟
- 一般社団法人 福岡市保育協会 ●社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会
- 社会福祉法人 福岡市社会福祉事業団 ●社会福祉法人 福岡県母子福祉協会
- 福岡大学病院 ●特定非営利活動法人 ふくおか・こども虐待防止センター
- 特定非営利活動法人 SOS子どもの村JAPAN ●特定非営利活動法人 ワーカーズコープ
- 福岡市民生委員児童委員協議会 ●福岡市乳児院児童養護施設協議会
- 福岡市里親会(つくしんぼ会) ●福岡市保護司会連絡協議会 ●福岡県警察本部
- 福岡法務局 ●福岡人権擁護委員協議会 ●特定非営利活動法人 にじいろCAP
- 特定非営利活動法人 チャイルドライン「もしもしキモチ」
- 特定非営利活動法人 子どもNPOセンター福岡
- ファミリーシップふくおか(里親養育支援共働事業実行委員会)
- 特定非営利活動法人 青少年の自立を支える福岡の会 ●特定非営利活動法人 そだちの樹
- 特定非営利活動法人 男女・子育て環境改善研究所 ●福岡市

## 子ども虐待防止市民フォーラム

つながろう 子どもの笑顔のために

### ひとりぼっちのないまちへ ～子どもとつながる地域づくりと虐待防止～

#### 主催

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

#### 日時

平成29年8月8日(火) 13:30～16:30

#### 会場

エルガーラホール

#### 参加者

約350名

#### 内容

- 主催者挨拶  
副市長 荒瀬 泰子
- 基調講演  
講師：幸重 忠孝さん(こどもソーシャルワークセンター(幸重社会福祉士事務所)代表)
- トークセッション  
ゲスト：糸長 紀子さん(みんなの居場所 ぼあんの樹 代表)  
田口 吾郎さん(特定非営利活動法人 いるかねっと 代表理事)  
松村 貴裕さん(株式会社D&Mコーポレーション 代表取締役会長)  
コーディネーター：馬男木 幸子さん(社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会 地域福祉課長)
- 呼びかけ(アピール文の朗読)  
三宅 玲子さん(特定非営利活動法人 チャイルドライン「もしもしキモチ」)
- 司会  
佐川 民さん(福岡県弁護士会)

# ひとりぼっちの まちへ

## ～まちだから出来る虐待防止と予防～

幸重 忠孝 さん 　こどもソーシャルワークセンター(幸重社会福祉事務所) 代表



### 講師プロフィール

1973年生まれ、岡山県出身。社会福祉士。児童養護施設職員、大学教員を経て滋賀県教育委員会のスクールソーシャルワーカーとして勤務。また、学生時代よりボランティアとして「特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば」に関わり、その後、理事長として子どもの貧困対策事業などに取り組む。2012年4月に、独立型社会福祉士事務所を設立し、滋賀県大津市を拠点に、夜の子どもの居場所や子ども食堂などの地域活動の運営支援やコーディネートを行っている。

主な著書に「子どもたちとつくる 貧困とひとりぼっちのまち」(かがわ出版、共著)など。

### ● 動画紹介 ●

#### ヴィジュアルノベル 「貧困を背負って生きる子どもたち 智の物語」

幸重さんが出会った子どもたちのエピソードを合わせて制作された物語で、小学6年生の智くんという男の子が主人公。家庭でのネグレクトや学校でのいじめ、そんな中で起きた事件とその後の大人たちのサポートなどについて、智くんのひとり言の形でつづられる。

※智くんの兄を主人公にした「仁の物語」とともに「You Tube」で公開中。

虐待というと、一般的には、専門の人たちが支援してくれると思われやすいと思います。もちろん、しんどさを抱えている色濃い部分に関しては、さまざまな専門機関の力が必要になってきますが、しんどい虐待状態は急に生まれるわけではなく、薄い状態からだんだん深刻になっていきます。その手前の段階でこそやるべきことがあるのではないのかと思うのです。深刻な状態で支援を受けた子どもたちも、やがてまちに帰っていきますので、そういった子どもたちや家庭を受けとめるまちをつくっていかなければいけないと思い、現在、まちの中でできる支援に軸を置いて活動をしています。

### なぜ「まち」を舞台に子ども虐待防止の取組みを始めたのか

#### ◆施設で満たされにくい感情

私は43歳で、岡山人です。福祉のことを勉強したいと関西の大学に行って、子どもの福祉を学び、最初に就いた仕事が児童養護施設の職員でした。施設には、虐待や貧困などさまざまな事情によって、児童相談所が家庭で暮らせないと判断した子どもたちが措置という形で入所します。3歳ぐらいから小学生、中学生、高校生世代までが集団生活をしています。

虐待を受けてきた子どもたちは、勉強についていけなかったり、身なりがちゃんとしていなかったりと当たり前なのが欠けた状態で、本当にしんどい状況になって施設にくるので、本当はたくさんの愛情を受ける必要があるのですが、制度上、施設では一人の職員が何人も子どもを見なければならぬ状態になっています。

私が施設の職員として働いていたころ、子どもたちが学校から帰ってきて、一人一人とたくさん関わりたい、いっぱいしゃべりたい、いろいろなことをしてあげたいという気持ちは持っていますが、夜の時間帯は職員一人で10人ぐらいの子どもを見なければいけません。一人10分話を聞こうと思っても、10人の子どもに通り聞いたら2時間近くかかりません。ゆっくり時間がとれないのです。

子どもたちは構ってほしいので、構ってもらえる状況をつくれます。向こうでけんかが始まるのです。小学生の子としゃべっていたら、ガチャーンと音がして、職員が行ってみると窓が割れていて、「どうしたん」と聞くと「何かむかつくことあってから、殴ったら割れてもうた」というようなことになります。そうすれば職員がその子に構うということ子どもたちはわかって

いるのです。間違った学習ですが、そうしないと順番をとばして職員が自分のところに来てくれないことはわかっているので、そういう行動があちこちで勃発してしまい、職員はそれに追われることになります。

では、「どうぞ地域の皆さん、施設にどんどん来て、子どもたちと関わってください」とお願いできるかというと、個人情報の絡みがあるので、それはなかなかできません。

そのような状況で、本当は構ってあげた方がいいのに、いろいろな体験をさせてあげたいのに、それができないジレンマを感じながら施設で仕事をしていました。

#### ◆施設を巣立った子どもたちを待つ過酷な現実

もう一つのしんどかったことは、子どもたちが施設を出た後の過酷な現実です。

児童福祉施設は、基本的に18歳で退所することになっています。私が働いていた施設では、高校に何とか頑張って入学しても、中退して18歳より前に退所する子たちが多かった。不登校で進級が危なくなり、テストで頑張るけれども良い成績がとれず高校を中退したり、やんちゃをして、中学校のときまでは怒られて済んでいた子たちが、高校だと停学や退学になります。そして、年度の途中で自立という形で施設から出ていけなくなります。この子どもたちは中卒で、免許も持っていません。正規の仕事にはつまずき、どうしても嘱託や非正規の仕事になります。

それから、仕事の問題と同時に大変なのが住まいの問題でした。部屋を借りるときには保証人が必要ですが、施設に入っている子どもたちは保証人になってくれるような親や親戚がいないことが多いです。親が借金を抱えていたり、入院していたり、刑務所に入っていたりする状態では保証人になってもらえないので、住まいが確保できず、結果として多くの子どもたちが住み込みの仕事に行きます。

私が施設で働いていた期間は決して長くありませんでしたが、その間、自立していった子どもたちのうち、誰一人として1年間仕事を続けることができませんでした。しかも、施設に相談に来たりすることなく、ある日突然夜逃げをして、職場の方から施設に「おたくの子やけどな、急におらんくなったんや」と

か「荷物どうすりゃいいんや」というような連絡が入ってきます。

そのような現実、「施設がどれだけ頑張り、福祉が頑張っても、その後、子どもたちはまちで生きていけないといけない。まちの中で何とかしていかないとどうにもならないのではないか」と感じていました。私は20代と若かったので、ただただ社会の状況に悔しがりながら施設で仕事をしていました。

#### ◆学校の中から見た被虐待児

その後、8年ほど大学の先生をしていたのですが、今から9年ほど前、文部科学省が、これからの小学校や中学校には学校の先生や心理カウンセラーだけでなく福祉のソーシャルワーカーも必要だと言い、スクールソーシャルワーカー事業が始まりました。「これだ、これがしたかったんだ」と、30代半ばでスクールソーシャルワーカーになり、今も続けています。

スクールソーシャルワーカーとして地域の学校に行き、授業中や昼休みに子ども達の様子を見に行くと、クラスの中に何人か、明らかに施設で出会った、被虐待児がとると言われる行動パターンの子たちがいることに気づきました。

いろいろな事情で家庭での愛情や体験が不足した結果、そういう行動パターンになるのですが、それを教育的な方法で解決しようとする、謝罪させて終わりということになってしまいます。丁寧に子どもの話を聞き、受け止めないで解決には向かわない状況の中で、先生たちも困っているということがよくありました。そして、これは学校だけで抱えていてはいけないと感じました。

#### ◆専門機関によるネットワークでの見守り支援の限界

現在、要保護児童対策地域協議会(以下、要対協)という、関係機関でネットワークをつくって支援する仕組みがあり、何かあったときにすぐ情報共有して動く体制になっています。例えば、あるケースで「このおうちにはネグレクトじゃないですか」「この子は心理的な虐待を受けているんじゃないですか」「もしかしたら身体的虐待もあるかもしれません」と、学校から福祉の

方に連絡をします。すると、命の危険があるケースは親から子どもを離して保護し、施設入所ということになりますが、多くの虐待ケースは、見守り支援ということで、要対協のメンバーが集まり、何かあったときに動けるよう情報共有することになります。

しかし、セーフティーネットは、落ちたときに下まで落ちないような安全な網という意味ではよいのですが、肝心の子どもたちを直接支える方法がなかなかないのです。一時的に子どもを保護したり施設で生活したりすることになる子どもたちというのは、本当にしんどい状況になったごく一部のケースか、または警察が介入するような事態になり一時保護などの支援を受けるケースです。子どもが病気になって子ども自身が大きな課題を抱えたら医療の出番ということになりますが、その手前の段階はみんな何もできずに見守っているだけになってしまいます。私はそこにもやもやして、「これではあかんやろう」と思っていました。なんとかこの子を直接支えることができれば、と思っても、なんとかする場所がなかったのです。

## ◆「山科醍醐こどものひろば」での取り組み

そんなとき、2009年、私は「山科醍醐こどものひろば」というNPO法人の理事長になりました。このNPOは発足して38年になりますが、最初は福岡で発足した「子ども劇場・親子劇場」の活動から始まっています。当時、福岡でお母さんたちを中心に子どもたちの文化や居場所づくりをやっていた活動が全国に広がり、京都では「山科醍醐こどものひろば」が親子劇場という形で生まれました。

私の親が岡山の子どもの劇場の役員だったので、子どものころ、そこに連れていかれていました。地域のお兄さん、お姉さん、おっちゃん、おばちゃんたちに面倒を見てもらい、関わらせてもらい、異年齢のいろいろな仲間がいて、楽しい時間をそこで過ごす。家庭でもない、学校でもない、地域の居場所で、いろいろな体験をさせてもらう。子ども時代にそういう経験があり、私が大学に入ったときに、京都にも子ども劇場があると聞き、「山科醍醐こどものひろば」に入って活動を始めました。

毎週のように地域の集会所に保育園、幼稚園の子、小学生、中学生の子どもたちが集まってきて、高校生になるとボランティアという形で補助に入り、大学生が場を仕切って、お楽しみ会的なイベントを地域でやったり、みんなで劇を見に行ったりという文化活動をしている会でした。こういう会に、子ども時代は地域の方たちに育ててもらい、また、大学生のときからはボランティアでずっと関わっていました。

世代交代で私が理事長となり、頑張ろうと思った一方で、福祉施設やスクールソーシャルワーカーの経験から、しんどい状況にある子どもたちはこの活動に来られないと感じていました。「山科醍醐こどものひろば」は民間の活動なので、参加費がかかり、参加するには申込書が必要で、また、山科区と伏見区醍醐という二つの区が合わさった広いエリアでの活動なので、集合場所への親御さんの送迎が交通費が必要でした。親御さんが参加費を払う余裕があって、申し込みができ、送迎または交通費を出せるような子どもしか来られないのです。

私が出会ってきた、虐待を受けた子どもたちのようなしんどい子たちにこそこういう活動が大事だから、ここをつなげる活動をつくらないといけないと思い、いろいろな活動を始めました。

## 子どもたちとつくる ひとりぼっちをなくすまちの活動

### ◆夕刻を支える夜の居場所

2010年にトワイライトステイ、フリースペースという、夕方5時から夜9時まで子どもたちが過ごせる居場所づくりを始めました。虐待、ネグレクト状態にある子どもたちは特に、夜の時間がしんどいです。おうちの人は、気持ちがあっても子どものことをきちんと見られない状況で、日中は学校が頑張って支援しても、夜はどうしても学校では何もしてあげられません。そういう子どもたちに、夜の時間、地域のお兄さん、お姉さん、おっちゃん、おばちゃんたちの力で、ほっとできる場所をつくろうと思って始めた活動です。

トワイライトステイでは、ご飯を食べてお風呂に行くほかは特別なことはせず、自由に、家のように過ご

### トワイライトステイ(大津市の場合)

- ・子どもたちは、週に2回、夕方5時から親が家に帰ってくるまでの時間を「こどもソーシャルワークセンター」で過ごす。
- ・利用する子どもたちは、母子家庭で経済的に苦しく親が夜遅くまで働いている家庭や、病気や障がいがあり子育てに行き詰っている家庭など、事情は様々である。
- ・1日に預かる子どもの数は数人だが、スタッフの数は、ボランティアを含めてその倍以上。子どもが構ってもらいたいときに十分に甘えられる体制が整っている。
- ・晩御飯は、子どもたちとスタッフが一緒につくり、一緒に銭湯にいき、一緒にジュースをかうといった、何気ない日常の体験を大事にしている。
- ・居場所としてだけでなく、子どもたちが楽しく過ごせる場所としてつながりをつくり、しんどくなったときにいつでも来られる場所を目指している。



トワイライトステイの様子

してもらっています。ただ、構ってほしい、愛情がたくさん欲しい子どもたちですから、大人はたくさん待機しておき、子どもたち一人一人に合わせられるようにしています。学校や学童保育、施設は子どもより大人の数のほうが少ないので、子どもが「今サッカーしたいねん」と言っても、手が離せないときは、「ごめん、6時まで待ってな」と待たせるなど、「待ってな」が増えていきます。でも、構ってほしい子どもたちに必要なことは、今すぐ満たされることだと思っています。ですから、それができる体制をつくっています。

それから、子どもたちと生活をともにする居場所だからこそ、見えてくることがあります。例えば、ネグ

レクトの子は、においが気になると言われることがあります。トワイライトステイでお風呂に入れてみると、髪を洗うときに、髪の毛をぬらさずにシャンプーの液をべちべちと塗りつけてそのまま流して、泡立てて洗っていなかったことがわかったということがありました。普通は親に洗ってもらったり一緒にお風呂に入っていたりして洗い方を理解しますが、この子たちは自分だけでお風呂に入っているのです。シャンプーは泡立てるものだというのを知らなかったのです。一緒にお風呂に入り、「よっしゃー、ウルトラマンだ」「泡立ててこうやるんやで」などと言いながらやっていると、しっかり洗えるようになり、においも気にならなくなっていきます。

また、あるときには、一緒にお風呂に入ると、お尻がすごく腫れ上がっていることがわかったこともあります。日ごろの生活では裸になりませんが、お風呂場で裸になるのは当たり前ですから、気づくことができます。必要に応じ、子どもたちを支援しているほかの機関に情報提供して早目早目に動けるようにし、本当の意味でセーフティーネットが機能するような取り組みをしています。

トワイライトステイで何かが劇的に変わるわけはありませんが、こちらが気にかけることができ、子どもたちも行き詰ったときに思い出せるという点で、安心できる居場所が週に1回あることの意味は大きいと思います。

そして、地域の居場所の強みは、関わる人がずっと変わらないということ。福祉施設や学校は、仕事です。人が入れ替わっていきます。子どもたちは場所に思い入れがあるのではなく、知っている職員がいるからたまに施設に戻ってくるのです。見ず知らずの窓口に電話したり、相談したりすることもないでしょう。しかし、まちのものはずっと続いていくので、まちとつながりがあることの意味は大きいと思います。

### ◆「子どもの創作劇」でつながる、まちと施設の子どものたち

こどものひろばでは、あるときからプロの児童劇団に協力してもらい、みんなで劇をつくり、半年間ワークショップを重ねて、最後は大きなホールで公演

するという取り組みをしていました。あるときから、地域の児童養護施設に声をかけ、施設の子たちが参加するようになりました。最初は一人、二人でしたが、数年経つと大人数に増えました。施設の子も地域の子もみんな一緒になって、毎週、最後の本番前は毎日のように集まって練習します。その中で、施設の職員さんが「施設の中でトラブルが減ってきた、子どもたちが言葉で伝えるようになった」と言われるようになりました。お芝居は、ないものがあるように見せたり、相手の気持ちとのやりとりがあったり、向こうの呼吸を見たりする必要があります。一生懸命に劇づくりをする中でコミュニケーションの力が生まれ、施設内でのトラブルが減っていったということだと思います。

また、離れて暮らしている親御さんたちがステージを見に来てくれるのは、子どもたちにとってうれしいことです。学校行事では目立つ役ができなくても、このお芝居はプロの人が入って本格的で、みんなに役割があって、自分らしい役が当たります。見に来た親御さんも、「おお、うちの子すごいやんか。歌って踊って演技してる」と喜びます。そういう場所が年に1回つくられます。劇づくりの中で関係性ができたら、まちの中で子どもたちとまた出会うこともできるようになっていきます。

創作劇に関わったスタッフたちの意識も変わります。施設の子たちと一緒に取り組む中で、親御さんがするのが当然とか、みんなでご両親そろっているという意識だったのが、親御さんと離れて暮らしている子がいるかもしれない、送り迎えしてもらえない子がいるかもしれない、と考えるようになり、運営側も変わっていきます。

## ◆中小企業のみなさんの力

私は、施設の子どもたちと関わる中で、仕事に付きときに壁にぶつかると感じていました。そこで、大きな会社や派遣の会社では続かなくても、中小企業で面倒見てもらったら子どもたちも頑張れるのではないかと思い、中小企業家同友会に入ったところ、私と同じようなことを考えて既に実践されている方がい

らっしゃって、とても驚きました。

同友会の方がやっていたのは、職場体験でした。夏休みや冬休みに、施設の子どもたちに中小企業のいろいろな店に来てもらい職場体験をしてもらうのですが、この活動を重ねる中で、中小企業のおっちゃんたちが変わっていくことに気がきました。これは職場体験でなく、職“人”体験だと気付いたのです。子どもたちが人と出会う場をつくっているのだから、実習やいろいろな職場を見ることはおまけであり、まちのいろいろな人と施設の子が仲よくなることに意味があるのだということに気が付いてきたのです。

子どもたちの実習先は、子どもの希望だけでなく、中小企業の人たちが何回も施設に通って、子どもたちの話をひたすら聞き、人となりわかってきたところで、その子に合った社長さんの会社につながというやり方でした。そこで1週間ほど実習をもらうと、子どもたちはすごく力を発揮します。

そんな体験を続けて5、6年後に子どもたちが施設を退所して、仕事に就きます。しかし、虐待を受けた子の現実は甘くはなく、仕事についても、1年ぐらいでやめてしまいます。それでも、今までだったら、仕事を辞めても、施設の担当の先生が辞めていたりお世話になって就職したからと施設には相談できずに、行方知れずになってしまっていたような子たちが、あのときお世話になったまちの写真屋さんになら、まちのケーキ屋さんになら、「俺、仕事やめてん」と連絡を入れられるのです。連絡が入ると、中小企業の皆さんがわっと集まって決起集会を開いて、「そんなんで人生終わるわけちゃうしな」「次の職場、一緒に見つけようぜ」と応援してくれるのです。そんなふうに、まちの中で施設を出た後の子どもたちを救う仕組みができてきました。

## ◆まちの美容室と取り組む「ハピハピカット」

もう1つ紹介したいのが、最近やり始めた「ハピハピカット」という、子どもたちを美容室につなげるプログラムです。ネグレクト状態にある子たちは特に身なりが気になります。1年近く髪を切っていなくてぼさぼさで、ご飯を食べるときにみそ汁に髪がバサッ

と入るほどの子がいましたが、このプログラムで髪を切ってもらって、さらさらヘアになって、帰りがけはずっと髪の毛を触って楽しんでいました。ずっと不登校だった中学生の女の子で、ごわごわだった髪を切った翌日、学校に行ったという子もいました。伸び放題の髪でいると、からかわれたり気持ち悪がられたりするものです。髪を切ると、みんなが「かわいい」とか「格好いい」と言ってくれます。美容師の力は侮りがたいと思います。

この活動は、ただ無料で切ってもらうのではなく、子どもたちやまちの人に応援してもらう仕組みになっています。例えばチャリティーのバッジをつくって、お店に置いたり、講演会のときに持ってきたりして、1口500円で子どもたちのカットへの協力をお願いします。このお金をもとに、美容師さんにはボランティアではなく、お金を払ってお客さんとして切ってもらうという仕組みにしている、それが大事なことだと考えています。髪を切ってもらい、みんなからほめられるという経験をすることで、子どもたちが身だしなみを大事にするように育っていくと思っています。

**虐待を受けて育った子どもの作文が教えてくれること**  
～まちの活動の意味～

まちのいろいろな活動を紹介してきましたが、こういう活動をしていると、「施設みたいに毎日子どもを見てくれるわけじゃないし、これにどんな意味があるのか」とよく言われます。子ども食堂も、「月に1回やっていて何の意味があるんですか」とよく言われます。

まちの活動の意味についてのヒントは、これから読む男の子の作文の中にあらわれていると思います。まちの活動がなぜ必要なのかを皆さんに感じてもらえればと思います。



ハピハピカット before



ハピハピカット after

施設で暮らしているかずきくんという16歳の男の子が、小学校時代の自分のことを思い出して書いた作文です。

## 裸足で駆け出し、逃げた、そして… かずき(16歳)

僕が家を飛び出したのは、小学2年。  
僕は母と二人で1部屋しかないアパートに住んでいた。

母は毎日、僕に暴力をふるっていた。  
宿題をやっていない、手伝いをしない、言うことをきかない…  
いろいろな理由で僕を殴ったり蹴ったりした。

僕が悪いことをしたときは、いいんだと思った。  
殴られても「僕が悪いのだから仕方がない」と思えた。  
でも、僕が学校で体育のドッジボールですごくがんばったことを話したくて、仕事から帰ってきたお母さんに、「ねえ、お母さん」と話しかけたとき、いきなり「うるせー、疲れてんだよ、空気読めよ」とカナキリ声で怒鳴られて、近くにあったマグカップを投げつけられたときは、混乱した。

今、悪いことした？  
お母さんを怒らせるようなことをしたのかな？って考えた。  
でも、すぐに考えるのはやめた。  
僕が悪いんだと思ったほうが、悩まなくて苦しなくていいと思ったから。  
暴力をふるわれたときは、「僕が悪い」を呪文のように唱えた。  
呪文を唱えると、不思議と痛みをあまり感じなかった。  
「僕が悪いよ。お母さんごめんさい。お母さんが殴ったりしなくてもいいいい子になります」—そう思って、願って毎日を過ごした。

僕の小学校の通学路に、小さな豆腐屋さんがあった。  
その豆腐屋のおじさんは、いつも僕たちが帰る頃に店の前で、「おかえり～。気をつけて帰れよ～」って声をかけてくれていた。  
友だちはいつも、おじさんと楽しそうに話したり、手を振ったりしていたけど、僕は一度もおじさんと話したことはなかった。  
ある日、僕がひとりで帰っていると、おじさんがいつものように店の前を出ていた。  
「おかえりなさい」と笑顔で言われた。  
僕は、誰かに「おかえりなさい」と言われたことは、はじめてだと思った。

そして、名前を聞かれた。  
「かずき君、気をつけて帰るんだよ」  
その日からおじさんは、僕を名前で呼んだ。  
僕がおとなに優しく名前を呼ばれたのは、はじめてだった。  
僕は幼稚園も保育園も行っていなかったし、おじいちゃん

も、おばあちゃんも親戚もない。  
僕を「かずき君」なんて呼ぶおとなはいない。  
お母さんは僕のことを名前で呼ばない。  
「おまえ」「おい」としか呼ばない。  
だから、名前を呼ばれて、胸がドキドキした。  
なんだかわからないけれど、涙が出そうになった。  
それからときどき、おじさんと話すようになった。  
ある日、おじさんのお店の椅子に座ってアイスクリームを  
食べていたらおじさんが、そっと僕の腕にふれて言った。  
「痛いかな」  
僕は一瞬、びっくりした。  
僕の体や顔にできた傷のことで何か言われたことは、はじ  
めてだったから。  
僕の腕にはお母さんに叩かれたアザと、タバコの火を押し  
つけられた根性焼きのあとがあった。

「痛いかな」って、あまりに普通におじさんが言うてくるから、  
僕はうなずいた。  
そしてすぐに、なにも聞かれていないのに、「僕が悪いこと  
したからだよ」と僕は言うていた。  
おじさんはいつもの優しい目で僕を見て、はっきりと「か  
ずき君は悪くないよ」と言った。  
おじさんは誰がやったとか、どうしてやられたとか、なんに  
も聞かなかった。

それから、お母さんが僕に暴力をふるったり、物を投げ  
たり、お風呂の冷たい水をかけたりはつづいていた。  
おじさんに、「かずき君は悪くないよ」と言われてから、僕の呪  
文は効き目がなくなってしまった。  
呪文の代わりに、「お母さん、なんで僕にこんな痛いことす  
るの？」  
「なんで僕を名前で呼んでくれないの」  
「お母さん、やめて」  
そんな言葉が頭の中をぐるぐるした。  
以前は感じなかった痛みを感じるようになった。  
体も心も痛くて痛くて、ちぎれてしまいそうだった。

そして、あの日のこと。  
僕は、お母さんと夜ごはんのカップラーメンを食べていた。  
音を立てないように緊張しながらラーメンをすすっていた  
とき、ラーメンをこぼしてしまった。  
お母さんは、「ラーメンぐらいまともに食べねーのか」と怒  
鳴って、水の入ったコップを僕に投げつけた。  
そして、僕の胸ぐらをつかんで思いきり叩きはじめた。  
そのとき、おじさんの顔が浮かんで、声が聞こえた。  
「かずき君」と僕を呼ぶおじさんの優しい声。  
僕は「お母さん、やめて」と叫んで、裸足で家を飛び出した。  
おじさんのところに走りつづけた。

おじさんの家に逃げて、僕は施設で暮らすことになった。  
僕は施設ではなく、おじさんの家で暮らしたいと何度も  
思った。  
でも、おじさんの家に逃げていなかったら、僕は死んでい  
たかもしれないと思う。  
僕は死んで、お母さんは刑務所に入っていたと思う。

おじさんは命の恩人。  
でも、僕は、お母さんに殺されてしまっていたほうがよかつ  
たのかもしれないと思うときが、16歳になった今でもとき  
どきある。

引用:「愛されなかった私たちが愛を知るまで 傷ついた子ど  
も時代を乗り越え生きる若者たち」  
(石川結貴・高橋亜美編著、かもがわ出版)

かずき君は豆腐屋のおじさんに出会いました。豆  
腐屋のおじさんは特別なことをしましたか。「お帰  
りなさい」と言うてくれて、名前を呼んでくれて、「けが  
どうしたんや」と心配してくれた、それだけなので  
す。でも、その「だけ」が虐待を受けた子には必要な  
のです。だから、彼はずっと我慢していた痛みを初め  
て感じるようになって、逃げるのができたのです。  
逃げた先は、学校でも、警察でも、虐待のホットライ  
ンへの電話でもない。豆腐屋のおじさんのもとに駆  
けていったのです。

地域で頑張っている小さな取組みに対し、「そんな  
ことをやって何の意味があるのか」と、厳しい言葉を  
もらうことがあります。しかし、私は、こういう子ども  
たちが地域の大人に出会うことで、もしかしたら「助  
けて」と、かずきくんのように飛び込めるのかもしれ  
ない、当たり前のことを当たり前だと気付けるのか  
もしれない、と思うのです。



ゲスト  
糸長 紀子 さん

「みんなの居場所 ぼあんの樹」代表

私たち「ぼあんの樹」は、東区箱崎校区で活動して  
おります。

箱崎校区は、2002年のJR箱崎駅の移転や、2005  
年の箱崎校区を南北に縦断する大きな道路の完成に  
より、まちの様子が大きく様変わりしました。新しく  
ファミリー対象のマンションや単身者用のマンショ  
ン、低層階のアパートが増え、平均世帯人数は1.7で  
す。そして、アジア系の外国の方も増えています。今  
は、昔からの伝統を中心に住民のつながりが残って  
いますが、代々箱崎で生まれ育ってきた住民と新しく  
箱崎の住民となった人たちがどうつながっていく  
か、また、地域との関わりがほとんどない単身者の人  
たちや外国から日本に来て一時的に住んでいる人た  
ちとの関わりをどう持つかが今後の課題となってい  
るように思われます。

「ぼあんの樹」の活動は、私と、20年近くのおつき  
合いになる半田さんという友達の2人で始めまし  
た。私は平成27年3月まで、公民館に主事として籍を  
置き、乳幼児やそのお母さん方、子どもたち、そして  
高齢者の方々と関わる機会が多くありました。半田  
さんも同年3月まで、幼稚園の放課後の先生として  
子どもたちと関わっていました。

今の子どもたちの様子を見てみると、SNSの普及  
や、共働き世帯が増えたことによって、留守家庭子ど  
も会など放課後に大勢の中で過ごす場所はあるけれ  
ども、その中に居場所を見つけられないでいる子が  
いること、また、共働きで忙しい家庭では、経済的に  
は困っていないけれども一人で食事をしている子ど

プロフィール

元公民館主事。平成28年1月に「地域の子どもたちが  
好きな時間に来て、思い思いに過ごせる場所」「多世代が  
過ごせる居場所」として、東区箱崎に「みんなの居場所  
ぼあんの樹」を開設。同年6月からは、放課後の居場所と  
して、「ぼあんの樹2丁目BRANCH」も開始し、活動を拡  
げている。

もや親に思いを吐き出せないでいる子どもがいるこ  
とがあります。核家族化していく中で、多世代の人と  
の関わりが少なくなり、子どもだけではなく、親も集  
団の中でコミュニケーションをとることが難しく  
なってきていると感じます。また、地域とのつながり  
の希薄化が子育て中の親の孤立をも招いていると感  
じるようになりました。

そのような周りの様子を見て、地域の子どもが好  
きな時間に来て、思い思いに過ごせる場所ができた  
らいいなと思うようになり、子どもだけでなく、いろ  
いろな世代の人たちが過ごせる場所をつくりたいと  
いうこと、子どもたちの笑顔を真ん中にして、みんな  
がほっとつながれる場所があるといいということをも  
よく半田さんと話をしていました。

でも、私たちのような地域のおばちゃん二人では  
資金を集めることも不可能で、どうしたらいいのか  
なと、なかなか前に進むことができずにいました。そ  
んなとき、ちょうど2年前に、以前箱崎小学校の教頭  
をしておられた先生とお会いし、その先生に私たち  
の思いをお話する機会がありました。その後、公民  
館主事をしていたときに関わりのあった福岡市社会  
福祉協議会の馬男木さんから私に連絡があり、馬男  
木さんとスクールソーシャルワーカーの梶谷さん  
のお二人も、子どもの居場所づくりについて考えてお  
られると知り、私と半田さんの思いを伝えました。そ  
こから話はとんとん拍子に進み、馬男木さん、梶谷  
さん、場所をお借りすることになるワーカーズコー  
プの方、私たちで、今後の展開に向けての話をする場

# トークセッション

が持てたのです。

そして、平成28年1月より、高齢者のデイサービス施設「ケア・ワークステーション福寿」をお借りして、みんなの居場所ぼあんの樹を毎月第3日曜日に始めることができました。その後6月より、今度は小学校の隣にあるSUKEYAというハンバーガー店で、夕方3時から5時までのお店が閉まっている時間に、放課後の居場所を始めることができるようになりました。

ボランティアスタッフは、身近な知り合いに声をかけたところ、私たちの活動に共感してくれる人たちが集まってくれました。「ぼあんの樹」という名前は、居場所に参加してくれている子どもたちと一緒に考え、「大きな木の木陰で、ぼあんと好きなようにのんびりと過ごせる場所」という意味をこめて、つけました。

活動開始時期	平成28年1月～
ボランティア	13名
活動地域	箱崎校区
対象	乳幼児親子・小学生・中学生・高校生 他どなたでも
活動日時	毎月第3日曜・長期休暇期間の毎週木曜 11:00～15:00
参加費	100円

「福寿」では、毎月第3日曜日と、長期休暇中の毎週木曜に活動をしていて、夏にはそうめん流しやスイカ割り、ビニールプールに水を張って水遊びをしたり、お隣りにある汐井公園へ行ってセミ採り、野球、段ボールで秘密基地などをつくったり、また、お料理が好きな子は昼食のおみそ汁やおにぎりの準備を手伝ってくれたり、それぞれが思い思いに過ごしています。みんなでお弁当を作ってピクニックに出かけることもあります。お煮しめを持っていったとき、タケノコを初めて食べたという子もいました。また、ある子は草花を摘んで花束をつくるセンスがすごくいいのですが、お家の人に怒られるから持って帰れないと言っていたので、花束をコップに挿してあげると、すごく喜んでいました。

ハンバーガー店SUKEYAでの活動は木曜日の夕方、平日の開催なので、ボランティアとして関われるスタッフが少なく、4名で活動しています。放課後に学校から直接SUKEYAに来た子どもたちは、宿題をすることをお約束にしています。宿題をして、簡単なおやつを食べた後、将棋や折り紙、絵を描くなど自由に遊びます。小学校の校庭に遊びに行くこともあります。来たらまず宿題をすることは、習慣として定着してきたようで、あるとき、学校が早く終わった日に、私たちスタッフより早くSUKEYAに来ていた子どもたちは既に宿題も終えて、おやつを静かに待っている状態で、私たちが子どもたちから「遅いよ、遅刻だよ」と怒られたこともありました。

活動開始時期	平成28年6月～
ボランティア	4名
活動地域	箱崎校区
対象	小学生・中学生
活動日時	毎週木曜日 15:00～17:00
参加費	無料

それから、地域の商店街でのあおぞら市「ぼっぼ市」にも出店させてもらっています。お店の運営・販売に関しては子どもたちにほとんど任せて、私たちスタッフはサポートに回りました。最後に売れ残りそうだった品物があり、スタッフは値下げを考えていたのですが、子どもたちは商店街の中を、品物を持って売って回り、結局、値下げもせずに全部売り切ってしまった。本当に子どもたちのパワーはすごいなと感じました。

クリスマスには、汐井公園で拾ってきた松ぼっくりでオーナメントを作り、ケーキもみんなで手作りしました。

今は夏休みで、毎週木曜日、年齢が違う子どもたちが交じって、けんかをしたり、スタッフに怒られたりしながらも、元気いっぱい笑顔いっぱいに1日を過ごしています。



ゲスト  
田口 吾郎 さん  
特定非営利活動法人いるかねっと  
代表理事

僕たちの団体は、「本当に困った人たちのために活動していこう、そして、笑顔をもたらしていきたい」ということをミッションとしています。

事業所は団地が多い地域にあり、最初の活動は、高齢者の方のごみ出しや電球の交換などを無料または100円のワンコインサービスとして引き受けるサービスや、高齢者サロンといった高齢者サービスから始めました。その中で、自治会長さんたちと子どもの問題についてお話しするようになり、「無料学習会マナビバ」を始め、その活動の中で子どもの食や健康の問題が気になり、子ども食堂も始めました。また、熊本地震や九州北部豪雨の際の物資輸送や災害ボランティアもしています。

「無料学習会マナビバ」では、困窮家庭を対象に格差の解消をするために、自治会長や社会福祉協議会、行政、地元の大学など、様々な人たちと連携して学習支援をすることを目指しています。広域の学習支援としては3ヶ所あり、例えば中央区春吉では、中央区の小中学生を対象に実施していて、二十数人の子どもたちが来ています。地域密着型の学習支援は、各中学校区の中学3年生のみを対象にした学習支援で、今年4月から始め、現在、12ヶ所でやっています。

マナビバでは、まず、事前ミーティングでその日に来る子どもたちの状況を共有します。次に、黒板にスケジュールを書いたり、机の配置を変えたりする等の教室の準備です。電気ビルやアクロス福岡の会議室、公民館、団地の集会所、福祉施設や学校、県の合同庁舎など様々な場所で教室を開催しているので、準備は結構大変ですが、環境設定、教室準備はとても大事です。

子どもたちの人数が増えましたが、できるだけ子

## プロフィール

教育格差の解消により子ども達が将来に希望を持って成長することを目指し、平成25年12月より福岡市西区で無料学習会「マナビバ」を立ち上げる。地元の様々な関係機関と連携し、地域密着型の学習支援を行う。

どもと1対1や1対2という個別学習の状況をつくりたいので、大人数をまとめて教室形式で受け入れるのではなく、学習時間のコマ数を増やす形で受け入れています。

開設から約3年で、延べ約3,000人の子どもたちに無料学習支援を提供してきており、昨年の参加人数は延べ約1,100人です。

ボランティア登録者数は、今はおそらく100名を超えていると思います。内訳としては、平日は大学生、休日は社会人が多いです。ボランティアさんたちには交通費の800円のみを支給しています。

次に、なぜ僕が学習支援を始めたのかという話をさせていただきます。

僕の地元には市営団地があり、同級生は約130人中100人が市営団地に住んでいました。僕が高校を卒業して大学に入る年、市営団地に住むその約100人の同級生の中からは、一人も大学に進学しませんでした。

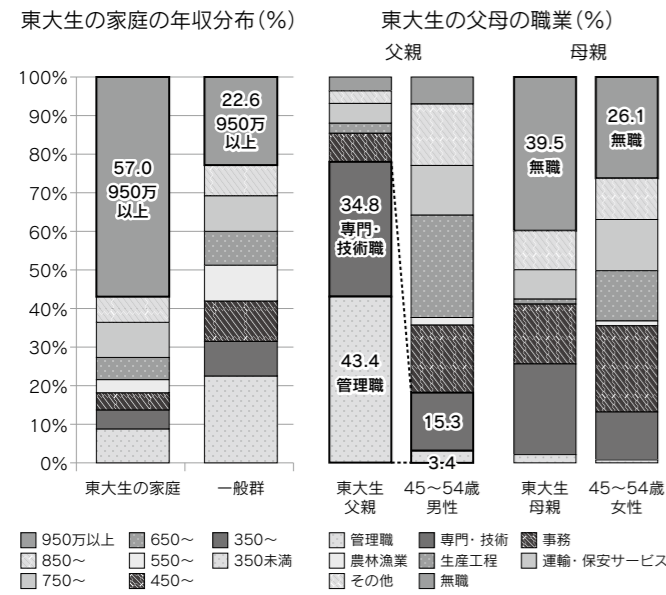
それから、東京で働いたり親の会社をサポートしたりした後、NPOをつくって高齢者の事業を始めたころに、自治会長さんと話をする中で、団地の子どもたちの数が少子化の影響で15人ほどになっていると聞きました。団地から大学に進学するのは、15人中1人ぐらいとのことでした。今の大学進学率は約60%で、専門学校まで入れると約80%です。しかし、僕の地元では7～8%で、10倍ほど違っていたのです。

親の収入が低い、十分な教育を受けられない、その結果、進学や就職で不利になる、高収入が望める職業につけない、そして、その子どもの世代もまた貧困になる。それがずっと続いていくのが貧困の連鎖です。



# トークセッション

【グラフ1】東大生の世帯収入と保護者の職業



※一般群とは、世帯主が40~50歳の世帯をいう。大学生の子がいる世帯全体と見なす。  
資料：「東京大学学生生活実態調査」(2012年)、厚生労働省「国民生活基礎調査」(2012年)、総務省「就業構造基本調査」(2012年) 作成者：舞田敏彦

東大生の家庭の年収…950万円以上が約60% (一般群の約3倍)  
東大生の保護者の職業…管理職または専門・技術職が約80% (一般群の約4倍)

上記の【グラフ1】では、東大生の家庭が一般群より高収入であることがわかります。

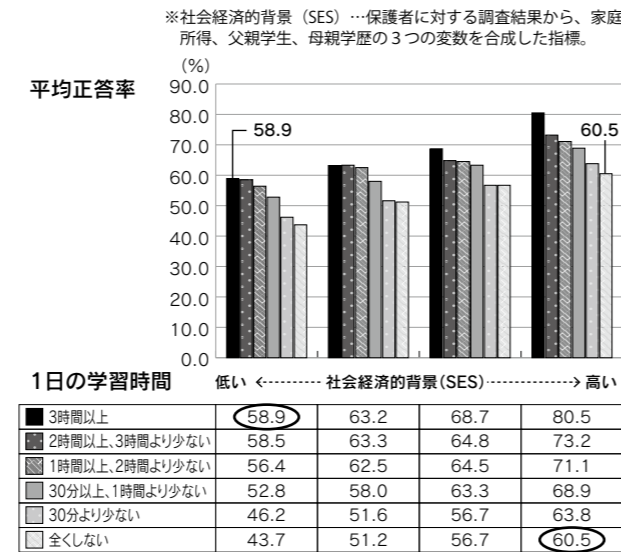
また、【グラフ2】では、データ上、最も年収等が低い層の子どもたちは、1日3時間以上勉強しても、最も年収等が高い層の子どもたちにはかなわないということになり、学習支援をやっている者として、正直悔しいところがあります。

無料学習会マナビバは、大型の市営団地で実施しています。市営団地入居の上限は、諸控除後の月収額が世帯全体で15万8,000円以内となっていて、年収は約200万円以下ということになります。優遇入居措置があるため、結果として、収入が低い高齢者、子育て世帯が多いという形になっています。

平成21年度のデータでは、福岡市の小中学生約11万人のうち、生活保護を受けている子どもが約2,300人、就学援助を受けている子が約25,000人、計約27,000人で、全体の約25%です。40人クラスの約10人の子どもたちが経済的支援を受けている計算になります。

貧困には、学校の勉強についていけないといった教育の格差、休みの日に家族で出かけていないといったコミュニケーションの格差、ご飯を食べられない、コンビニの弁当ばかりといった健康の格差が背景にあると思います。特に教育格差については、学力不足や低学歴によって安定した職業につくことができず、貧困の連鎖を生み出す要因になって

【グラフ2】社会経済的背景別、学習時間と国語A正答率の平均値(小6)



文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)」の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究(国立大学法人お茶の水女子大学)より

最も高い社会経済的背景グループで「全く勉強しない」子どもの正答率…60.5%  
最も低い社会経済的背景グループで「1日3時間以上勉強する」子どもの正答率…58.9%

いると思います。

僕は、教育格差の改善によって貧困の連鎖は本当になくなると思います。特定の地域内で、生活保護や就学援助を受けている子を対象にした学習支援を徹底的に展開していけば、この問題は撲滅できるのではないかと思います。僕は、子どもが進学を諦めるのをもう見たくないのです。

今年の1月、僕は「福岡市全域で学習支援をやります」と宣言し、現在12ヶ所、9月には17ヶ所に増やし、大型市営団地の約90%、概ね500世帯を対象とした体制ができる予定です。福岡市の144校区のうち29校区、つまり約5分の1の地域で、マナビバに子どもが自由に通える状況になります。

マナビバに来ているほぼ全ての子どもたちの学力が向上しており、全ての中学3年生が公立高校に合格しています。子どもたちには、ボランティアさんたちが1対1で一生懸命に教え、コミュニケーションをとり、僕も進路指導することもあります。こういった一生懸命な大人と接することができた子どもたちが、今年でいうと100人以上高校に進学したということになります。「貧困の連鎖を撲滅します」と言っていますが、もしかしたら、実現できないかもしれませんが、しかし、僕たちが10年ぐらいこの取り組みを続けられれば、関わった子どもたちが1,000人とか2,000人ぐらいになって、いつかその子どもたちが社会を変えてくれるのではないかと考えています。



ゲスト  
松村 貴裕 さん  
株式会社D&Mコーポレーション  
代表取締役会長

私は、就労を通じた支援をさせていただいています。我々の会社に施設から通ってきている女の子がいますが、その方は18歳で高校を卒業してから施設を退所するまでの約2年間の間に、いわゆる経済的な自立をしないといけない。我々は、彼女の自立を目標として、支援に取り組んでいます。

まず、当社の理念と事業内容をお伝えし、具体的な支援の内容についてはトークセッションの中でお話しできればと思います。



レクリエーションの様子



敬老会の様子

## プロフィール

看護師、デイサービススタッフを経て現職。福岡市内で有料老人ホーム、デイサービス、グループホーム、訪問看護・介護など複数の高齢者介護サービスを展開。「福岡県就労支援事業者機構」に登録しており、就労を通じた若者の支援にも積極的に取り組む。

～動画で、企業理念や事業内容をご紹介いただきました。～

## 株式会社 D&Mコーポレーションの会社紹介

2004年よりデイサービス、有料老人ホーム、グループホームなどの介護事業を運営。

より地域に深く根ざし、困っている高齢者に手を差し伸べるため、定期巡回型、随時対応型訪問介護・看護サービスも始めた(利用者の自宅のナースコールから連絡を受け、すぐに対応ができる仕組み)。施設入所や入院の前の最後の砦でありたいと考えている。

理想は、住み慣れた地域に末永く暮らすことのできる支援体制を作ること、地域の高齢者に、選択肢のある人生を過ごしていただくこと、高齢者に楽しいことや趣味などをもっといただき、役割のある生活をして頂くこと、なじみの地域で最期を迎えたいという希望に寄り添うことなどである。

このことを実現するためには、働く社員が長く勤められるような労働環境を作らなければならない。その中で特に大事なことが、社員の夢を実現できるための様々な仕掛けである。資格を取るための支援制度、独立したい方へのノウハウの提供、介護スキルや知識向上のための勉強会など、制度の構築や環境の改善が社長・会社に課せられた使命であり、地域そして人々の安らぎをつくっていくことが、全スタッフの使命である。



コーディネーター  
**馬男木 幸子 さん**  
社会福祉法人  
福岡市社会福祉協議会  
地域福祉課長

## 各取組みの工夫と配慮

【馬男木】

まずは松村さんにお聞きします。基調講演の中で、虐待を受けたお子さんは仕事が続かない子が多いという話がありましたが、実際にそういうお子さんを雇用され、現場でどのような対応をされていますか。

【松村】

施設から仕事に来ている子は、今来ている女の子で二人目です。一人目の女の子は、3ヶ月で離職しました。一人目の子を雇ったときは、私はそのまま現場に任せ、具体的な指示もせずにはいました。介護の現場は命の駆け引きがある場所なので、先輩職員は厳しいです。彼らとしては当たり前のことを言った際に、本人にはまだ受け取る容量がなくて、離職につながってしまったと感じています。

二人目の子を雇ってからは、経験を踏まえて、どうすべきなのかを考えました。「現場の全員に彼女の情報を開示して見守っていくべきなのか。でも、それは本当の自立なのか」と考えた結果、現場責任者を中心に一つのハブとしてその人にだけ情報を伝えました。さらに彼女のリカバリーやフォローをしてほしいという伝達を行いました。そこから、彼女の人間関係の拡がりに伴い少しずつ情報を共有し、フォローしていった結果、雇ってから1年8ヶ月経過したところです。本人も少しずつコミュニケーション能力が上がり、自信もつけながら仕事を続けています。

【馬男木】

次に、糸長さんにお尋ねします。子ども食堂イコール貧困というテーマで報道されることが多いように感じますが、子ども食堂に関する今の報道のことや子ども食堂のような取組みの必要性について、現場でどう感じているのか教えてくださいませんか。

【糸長】

貧困ということを表に出すと、地域からは敬遠されることもあると感じます。また、貧困というのは、外から見てもわからないところがあります。貧困というこ

とよりも、経済的には困ってなくても、今は共働きのご家庭が多く、子どもたちが一人でご飯を食べているという状況の方が私たちの目についたので、食べることを真ん中に置くと、人と人がつながりやすいのかなという考え方で活動しています。

また、ご飯を一緒につくることが大事だとも思っています。大人がつくって、「はい、どうぞ。」というのではなく、一緒につくって、一緒に当たり前の生活体験をする。私たちが生活の中で自然に覚えたようなことを、子どもたちに体験させたいのです。回を重ねるごとに包丁の使い方も上手になって、新しくやってきた子に教えてくれる子もいます。

貧困というのを表に出すのではなく、来た子どもたちみんなと一緒にご飯をつくってワイワイ言いながら同じものを食べる、そういう時間・空間が大事だと思っています。様々な生活体験をすることが、子どもたちが育っていく中でいろいろなことを克服する力になるのではないかなと思います。

【馬男木】

子ども食堂のような活動は、食べられない子に食べさせるという場ではなくて、関係性の貧困——ネグレクトだけではなく、共働き世帯の方など、大人との関わりが減っているところを補う場として、一緒に食べるという団らんを経験したり、片付けるという生活体験を経験したりする場所としても意味があるということですね。

次に、田口さんにお尋ねします。学習支援の場にたくさんのお子たちに来てもらう工夫や、多くのボランティアさんに協力していただく工夫について教えてください。

【田口】

チラシ配布などの広報をどれだけ頑張っても、子どももボランティアさんも来ないと思います。だからこそ、来てくれた人たちが辞めないように工夫します。来なくなるには理由があると思います。そこを減らすよう工夫するだけです。

最初に学習支援をスタートしたときのボランティアは12人だったのですが、そのときのメンバーが今も6人います。何かを決めるとき、その人たちと一生懸命話し合い、自分だけでは決めないということは気をつけています。子どもたちに対してもそうです。

【馬男木】

私は社会福祉協議会の地域支援の仕事で、地域の方たちから、「NPO法人の活動と地域活動をどうつなげたらいいかわからない」という声をお聞きしますが、NPOとしてどうやって地域とつながることが

できたのでしょうか。

【田口】

2点ありますが、1点目は、自分自身が変わったということです。3~4年前、NPOを始めて高齢者の事業をやっていたときに地域に説明に行っていたときの僕は、「素晴らしい企画をなぜ地域の人たちは受け入れてくれないのだろう」というスタンスで、なかなかうまくいきませんでした。しかし、マナビバ事業に関しては、「絶対にやらなければいけない」「僕の背景には子どもたちがいる」といった思いが強くなりました。そのため、地域の方に何か言われても、粘り強く交渉を続けていけたと思います。

2点目は、子どもの問題への取組みに関して、受け手側の方々が好意的であるということです。例えば公民館の方や団地の自治会長さんなど、場所をお貸しくださる方たちがすごく好意的です。子どものことをやるとなると、みんながいい人になるというようなところが背景としてあると思います。

【馬男木】

この学習支援については、思いや課題を地域の方にも十分共有、共感していただいたということですね。

では、松村さんにお尋ねします。介護の現場では、身体介護だけではなく、生活の支援やコミュニケーションも必要だと思います。施設から通うお子さんがそこで働く際、家庭での生活経験の不足があるのではないかなと思いますが、職場でどのようにフォローされていますか。

【松村】

生活における1つ1つの定義を明確化するということです。例えば、掃除という定義でも捉え方はいろいろあって、テーブルを四角に拭く人もいれば、丸く拭いて掃除だという人もいるというように、それぞれの定義が違います。それを明確化して、一つずつこころを、ああするのだと伝えます。それをしなければ、本人が「掃除をやりました」と上司に報告したときに、互いの定義が違うので、上司は「それは掃除じゃないよ」と返すわけです。この押し問答が最も離職につながりやすいと、一人目の子が辞めたときに感じました。

ですから、こちらから現場に指示を出すときにも、掃除と言っても伝わらないので、どこどこを、どのようにするのが掃除なのだと伝えてくれと、そこまで指示を出します。

【馬男木】

忙しい介護の現場で、そのお子さんへの指導方法を、松村さんが考えていらっしゃるのと同じように現場の先輩職員さんに理解してもらおうのは大変だった

のではないのでしょうか。

【松村】

そこが一番大変な部分で、全員に対して一斉に説明しても伝わりませんので、ハブとなる人をつくることが大事です。うちの会社では、3~4人の主任の中で誰がこの子にとって一番相談しやすいかを見極め、その主任に対してその子についての情報や指導方法等を伝えていき、そこから展開していきます。「個」対「個」のコミュニケーションから発生して広がっていかねば、大きなマニュアルの中で育成方法を伝えようとしても通じないのだと思います。

## 人と人が出会うことの価値 ~まちと福祉~

【馬男木】

コメンテーターの幸重さんは、3名のゲストの取組みと虐待防止がどのようにつながっていると考えられますか。

【幸重】

居場所、学習支援、職場での支援、三者三様で、それぞれのつながりは見出しにくいと思われたかもしれませんが、私は、本当は全部つながっている話だと思いました。

虐待に限らず福祉分野では、専門分野が細分化されています。小さいときは保健師さんを中心に虐待防止をやりましょう、学校に入ったら後は先生たちで頑張りましょう、就職になると、若者のことは企業さん頑張ってください、というような形です。また、福祉の業界は、細分化して突き詰めてしまうことが多いと感じます。例えば、有名な全国の虐待防止のイベントがあるのですが、そういうところでは様々な学習会があり、現場の人たちが「そうそう、虐待を受けている子にはこういう行動特性があるよね」といったマニアックな話で盛り上がっていますが、そこに一般のまちの人はほとんど参加しません。わかっている人だけで盛り上がっているようなものです。

でも、子どもたちはやがてまちで生きていかなければいけないのです。まちが福祉の課題の中に入っているのに、福祉とまちが乖離していると感じます。

では、まちの人にとって虐待とは何かというと、新聞やテレビで報道される、鬼のような親がいて、子どもをひどい虐待に遭わせて、時には子どもを殺すといったイメージなのです。しかし、実際に虐待をしている親たちと関わると、少しやり方を間違っているところはありますが、子どもへの愛情は持っていま

す。関わっている人はそれを知っているのですが、きちんとまちの人に伝わっていないのです。

ゲストの3名の方たちは、居場所、学習支援、就労支援というそれぞれの場で、虐待を受けた子どもたちにきつと関わっていくことになります。その中で、その子たちができないことに気付いたり、実はこんな力を持っているということが見えたりするはず。人と人が会うことに価値があります。今までの歴史の中では、虐待のことは難しいからと専門家の領域のようになっていた気がしますが、ここにやっと今、まちの力、市民の力が入ってきたのかなと思います。

虐待という言葉でひとまとめにしていますが、いろいろな子たちに出会って来て、本当に一人一人タイプはばらばらです。この子には今仕事が必要だ、この子には勉強が必要だ、この子はもっと手前の食やほっとする場所が必要だというように、必要としていることはまちまちです。それぞれの子どもの必要なものにどうつなげていくのかということが、今、この業界で必要とされているのだと思います。

また、子どもは自分が虐待を受けていると自覚していないことが多いです。現在支援を受けている子どもたちは、基本的には何らかのSOSを大人がキャッチしたことで支援につながっています。先ほどのかずきくんの作文でもそうでしたが、子どもたちは、最後の最後に飛び出しては行くのですが、それまでは、自ら「親にこんなことをされています」というSOSを出さないのです。その間、おそらく、周りの大人がセーフティーネットを作って見守り、支援していたと思いますが、子どもからすると、誰にも気づいてもらっていないと感じています。

でも、こうやってまちのいろいろな人と居場所や学習支援や就職の場で出会っていけば、少しずつ自分とほかの子との違いがわかってきて、「この人だったら言える」とぼろっと言うのではないかと思います。相談室で、「さあ、今からあなたが受けた虐待についてしゃべりなさい」と言われて話すのではなくて、遊びの中や、学びの中の休憩時間、仕事の昼休みなどの中で、つぶやきとして出てくるものだと思うのです。ですから、こういったまちの取組みによる虐待防止は、本当にこれからだと思っています。

## 話すとなりに

【幸重】

私から、ゲストの皆さんにリクエストがあります。

10年後、20年後に、自分たちの活動で出会った子がこんなふうになってほしいとか、今の活動がこう発展してほしいといったことをお聞きしたいです。今日の話聞いていて、話すとなりになるのだと思いました。頭の中で思っているだけだったり、話を聞いたり、本を読んでおもしろいなと思ったりしても、思うだけで形になりませんが、人に話すと、スムーズではなくても形になると思います。言ったら形になるかもしれないので、ぜひ教えてください。

【糸長】

今、ぼあんの樹に来ている子は、小学校の低学年の子が多いですが、活動も1年を過ぎ、子どもたちと少しずつ信頼関係ができて、子どもたちがぼろっとなりにいろいろなことを話してくれるようになりました。その関係がほかの方たちとも築けるようになって育っていったらと思います。そして、10年後、20年後に、高校生や大学生になったときに、私たちのスタッフ、仲間として関わってくれたら嬉しいです。そして、子どもたちが簡単に行けるような場が同じ地域の中にたくさんできることを願っています。

【田口】

よく誤解されますが、学習支援は学力を上げるのが目的ではありません。学習を通して、小さな「できた」を積み重ねることによって自己肯定感が生まれ、結果的にポジティブな方向に向かっていくところが学習支援の大きな意義だと思います。

マナビバに来ている子どもたちがみんなポジティブな方向に向かってくれて、将来仕事を選ぶときに、「自分はこれがしたい」と自信を持って言うようになってくれたらいいなと思います。そういった子たちが増えていったら、いいまちになるのではないかと想像しています。

【松村】

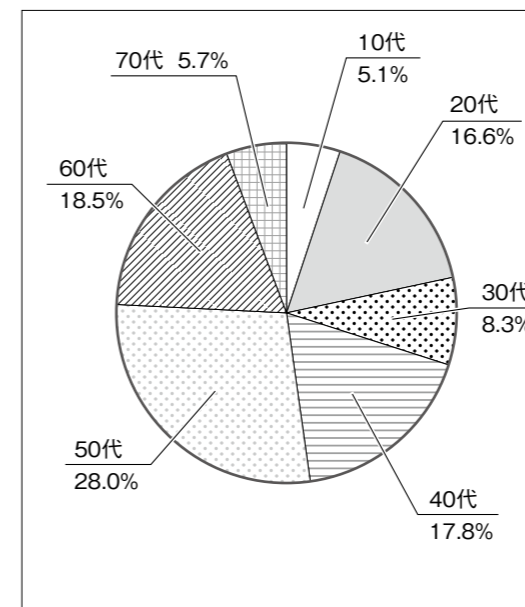
今雇っている子が少しずつ成長してって、主任という立場になって、厳しい環境で育った子が次に入社した際のかけ橋になれば理想的だと思います。

【幸重】

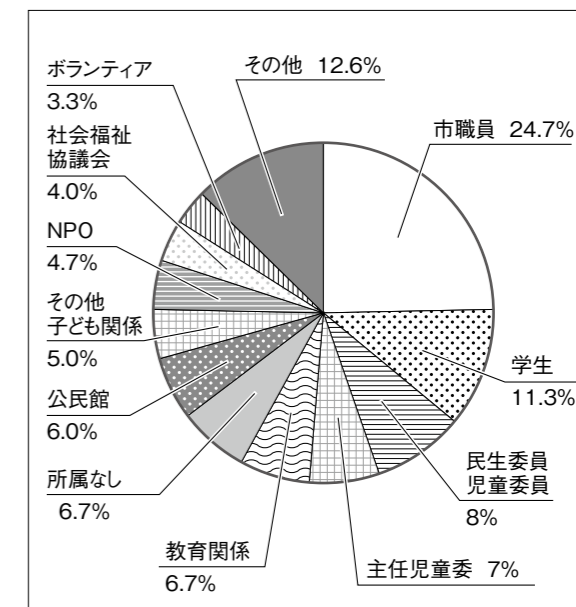
言ったら形になるというのは、今日参加した皆さんも同じです。このフォーラムに参加して、聞いた話や刺激を受けたことを頭の中に収めるだけでなく、ぜひ誰かに話してほしいです。今日の話でおかしいと思うことがあってもいいと思います。それも含めて、できれば言葉にして、皆さんが家の食卓や職場や地域の方に何か話していったら、そこから次のものが生まれるのではないかと思います。

## 参加者アンケート

参加者年代(回答者157名)



参加者職種(回答者150名)



### アンケート 自由記述欄から

※ ( ) 内は、職種

- 虐待防止とは家庭の中に入っていくものだと思っていたが、実際は、子どもはまちで生活していくのだから、地域が一丸となって支えることが大事だと思った。(医療関係)
- 地域でのボランティア活動はなかなか成果が見えず、やる意味があるのかなと思ってしまいが、今日のお話を聞いて地域での活動の大切さを改めて感じた。(主任児童委員)
- 大きなことでなく小さな関わりでも子どもの支えになるかもしれないと感じた。小さなことでも相談されやすい人になりたいと思った。(医療関係)
- 全ての環境が整ってから活動を始めようとするのではなく、ほかに活用できる社会資源がないかを探して、上手に活用することが長続きするコツだと思った。(その他)
- 成長のステージごとに十分対応できる準備と、引き継ぐ体制が必要だと感じた。施設ごと、学校ごとだけでなく、それをつなげる人や制度が必要だと思う。(主任児童委員)
- 大きな組織ではなく、小さな居場所を多く作ることができればよいと思った。(その他)
- 福祉や虐待に興味を持っていない人にも呼びかける工夫が必要だと思った。(その他)

市民フォーラムに参加した市民の皆様へ推進委員会の活動を紹介し、参加者との交流、意識啓発を図ることを目的に開催しました。

休憩中等に多くの参加者にお立ち寄りいただいたほか、推進委員会の参加団体同士がお互いの活動を知る機会にもなりました。

日時:平成29年8月8日(火)13:00~17:00 (市民フォーラムと同時開催)

場所:エルガーラホール 8階ロビー

主催:福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

出展:14団体

内容:団体の活動を紹介するパネル等の展示、リーフレットの配布、物品販売、募金等

## 出展団体

- 福岡市乳児院児童養護施設協議会
- 特定非営利活動法人 ふくおか・こどもの虐待防止センター
- 特定非営利活動法人 子どもNPOセンター福岡
- ファミリーシップふくおか(里親養育支援共働事業実行委員会)
- 福岡市民生委員児童委員協議会
- 社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会 ●特定非営利活動法人 SOS子どもの村JAPAN
- 福岡市里親会(つくしんぼ会) ●福岡県弁護士会
- 特定非営利活動法人 チャイルドライン「もしもしキモチ」
- 特定非営利活動法人 ワーカーズコープ ●一般社団法人 福岡県助産師会
- 福岡人権擁護委員協議会 ●福岡市(里親リクルートなど)



～つながろう～  
子どもの笑顔のために  
福岡ソフトバンクホークスも応援します!



# 「虐待死ゼロのまち」をめざして 私たちに何ができるか、 話し合い、行動しましょう。

虐待による子どもの死亡事件があとを絶ちません。

こんな悲しいまちにしないために、私たちに何ができるか、考えましょう。

想像してみましょう。

抱きしめてもらいたい母親に、突き放された、その子の悲しみ。

ほほえんでもらいたい父親に、置き去りにされた、その子の恐怖を。

耳を傾けてみましょう。

死んでしまったその子が、命をかけて訴えたかったこと。

短い生涯を終えなければならなかった、その子の無念に。

思い出してみましょう。

泣きやまぬわが子に、思わずイライラした、あの日。

涙によごれて眠ってしまった顔に、胸しめつけられた夜のことを。

思い出してみましょう

わが子の誕生に感動して、涙したあの日。

つらいときに私たちの心を癒してくれた、あの笑顔を。

私たちに何ができるか、話し合しましょう。

そして、立ち上がり、できることから行動しましょう。

市民も行政も、地域も企業も、そしてメディアも。

あらゆる人に呼びかけます。

「虐待死ゼロのまちをめざすネットワーク」に、どうぞあなたも参加してください。

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会



子どもが虐待で死ぬときは、子どもも親もが社会から見捨てられている。  
そこで子どもは、頼る人もなく、過酷な生活に耐え、力尽きて孤独に命を閉じる。

日本子どもの虐待防止学会会長 小林美智子